

2025年はだいぶ駆け足で過ぎていきました。前回の報告書を書いた7月から半年間、何をしたかと考えてみると、胎児の健やかな成長を祈願しつつ研究を進めていた記憶しかありません。出産と新生児育児という過程で母体の脳は数%縮小してしまうと聞きましたが、ミスクな記憶を司る領域から消えていったのかもしれませんが。

2026年1月2日に第一子を出産しました。40週間の妊娠は存外あっという間で、幸い問題もなく過ぎました。最初の2~3ヶ月は貧血がひどく、新しいホルモンバランスに体調が乱されていましたが、元々暑さが苦手なせいもあったのかもしれませんが。臨月になると大きなお腹が体の自由を損なって難儀するものだと思っていましたが、人間の脳と体の順応力は見事なもので、案外違和感なく過ごせていました。唯一順応し損ねた足裏だけが、4割近く増えた体重の影響を受けて日々痛みを訴えていました。正直言うと、私はあまり妊婦扱いをされることがしっくりこなくて、例えば友達に友達に会ったときに“*She's Reika, my pregnant friend*”と紹介されると、これまで30余年培ってきた自分のアイデンティティが、所属して1年足らずの妊婦というカテゴリで置き換わってしまうような、居心地の悪さを感じたりしていました。いざ我が子が生まれてきても、「この不思議な可愛い生き物が自分から出てきたのか」という違和感しかなかったのですが、1ヶ月半の育児を経て、最近では自分の中に確かな変化を感じるようになりました。その一つとして、夢の中でたまに別の人生を生きているときがありますが、最近では例えば自分が架空の男性になっても、必ず一緒に子供がいるようになりました。一般的に、女性は妊娠を通して母になり、男性は育児を通して父になると言いますが、私もようやく自認が追い付いてきたようです。

研究面としては、実に執筆2年間査読1年間をかけたPhD論文がようやく(!)出版されました(<https://www.nature.com/articles/s41589-025-02104-x>)。もうずっと、「この論文執筆/査読実験が全部終わったらようやくポスドクの研究に専念できる…」と楽しみにしてきて、皮肉なことにいざという頃にはもうポスドク自体も終盤を迎えています。その論文の出版日が私の出産日と数日しか変わらなかったため、慌ただしい中で余韻を噛み締めることもなく過ぎて行ってしまいました。そう考えると、私が3年もかけて書いてきた論文の一方で人間は1年足らずで生まれてくるということで、妊娠出産のスピード感が凄いのかはたまたそれだけ年月を要する科学研究が凄いのか、脳がバグリそうになります。他にも育休中に書き上げたかったポスドク研究の論文があったのですが、日々目を見張るような成長を遂げていく我が子と違って、なかなか思うように進みません。今年はポスドクの研究を2本とも論文にしてジョブマーケットに出たいので、自分のやりたい研究と家族の心身の健康がうまくかみ合う日々の重ね方を見つけていきたいです。

これが最後のポスドク報告書になると思います。PhD時代から実に10年間、船井財団の支援のおかげでここまで来れました。事務局の皆様をはじめ、本当に本当にありがとうございました。この御恩を財団や社会に還元していけるような存在になれるよう、これからも頑張ります。

2026年2月27日 鄭 麗嘉

追記:最後なので感慨深く過去の報告書を読み返していると、以前と比べてあまり自分の恥をさらけ出していないことに気が付きました。アメリカ人はポジティブなことばかり話す(カリフォルニアは特にその傾向が強い)ので、私もそれに染まってしまっているのかもしれませんが。あるいはもともと旅の恥はかき捨てマインドだったのが、グリーンカードも取って旅人から住人になったことで欲が出てきたのかもしれませんが。最後ですし、もう現役奨学生でもない私の報告書をここまで見てくださっている方も少ないでしょうし、せっかくなので赤裸々に日々の事件をまとめます。

① 育休中こっそり実験騒動

アメリカは州によって産休・育休の基準がかなり異なります。カリフォルニア州では4~6週間の産休に加え、8週間までの **Family bonding period** (いわゆる育休) が申請できます。ただ、私は **LSRF** ポスドク奨学金を貰っている関係で、給与名目が **Salary** ではなく **Stipend** なので、州の育休補助は申請できず、代わりに **LSRF** 奨学金の定める産休支援を組み合わせているので、そのあたりは説明しだすとややこしいのですが...ともかく、6週間の産休+4週間の育休を取ることにしていました。今現在、正式な育休があと3週間弱残っています。

ところがまあワーカホリックが染みついているので実験できない日々にもどうしても我慢できなくなり、出産後1ヶ月で体調がだいぶ戻ったのを境に、深夜過ぎの誰とも合わない時間にこっそりラボに行って数時間ほど実験するようになりました。2週間ほど実験して、欲しいデータが取れたのでやめたのですが、私のラボの他メンバーも大概ワーカホリックなもんで、その間2回ラボの他の人と遭遇しました。その時はちょっと気まずいながら笑い話として済んだのですが、そのことをラボの別メンバー(今書いている論文の共著者)が後から知って私に怒っているようです。

もともと **Google Doc** 上で論文に必要な残りの実験を割り振ったとき、私が担当すると記名した簡単な実験を彼がなぜか無断で彼の名前に書き直していたのですが、それ以降1ヶ月以上待ってもやっておらず、そうこうしているうちに私のメインの実験のついでにそのデータも取れたので、私のデータを **placeholder** という名目で置いたのですが、それで怒らせてしまったようです。コミュニケーション不足だと責められ、まあそれはその通りですし、産休中こっそり実験をやっているのが気まずいのと公にされるといろいろまずいのと「産休中に休まないなんて悪例を作るな」とヨーロッパ人の友達にキレられそうなので黙っていたというあくまで個人的な背景を理解してもらおうというのも無理な話だとは思いますが、それを言うならそもそも私が先に担当として記名していたのを無断で書きなおしたそちらのコミュニケーションはどうなんだという話です。私の目の前でわざと扉を閉めてきたりと(大人げない)仕返しをされていたのですが、彼が先生に相談したことで先生も交えて話し合えたので、多少はすっきりしてくれたでしょうか。私なりの事情を先生は理解してくれたものの、彼にはやっぱり納得はしてもらえなかったようで、時間が彼の怒りを癒してくれることを祈ります。まあ、どのみち同じ時期にジョブマーケットに出る時点でどうしても、いずれ多少なりとも気まずくなることはおそらく避けられなかったのだと思います。

② 法律無視ドライバー当て逃げ事件

深夜過ぎにラボに向かう金曜日、通り慣れたスタンフォードの交差点を青信号で直進すると、左折禁止の対向車線を左折してくる車と遭遇しました。慌てて急ブレーキを踏むも間に合わず、衝突してしまいました。スピードを落としていたので衝撃は小さく、お互い無傷で車体も軽度の損傷で、一瞬「自分に非はないし、車体の傷も軽そうだし、実験に急ぎたいし、無かったことにしておこうかな」と思ったのですが、相手が交差点の向こうで停車して出てきたので、私も外に出ました。夜中1時、コヨーテも徘徊するスタンフォードのキャンパスなのでおそろおそろです。こちらに向かってくる相手のドライバーは中年男性で警戒を強めました。私を見るやいなや、スペイン語訛りの英語で「**You're driving too fast!**」と叫んできました。私も伊達にアメリカに10年住んでいません、「**You turned left at the no-left-turn intersection!**」と日本語訛りの英語で叫び返しました。ところが彼も負けじと「**I was driving straight, you were driving too fast!**」と言い張ってきました。一種のガスライティングです。私は彼の見え透いた嘘に困惑しましたが、「**I was going straight, but you turned left. This is no-left-turn intersection**」ととりあえず繰り返しました。彼は「**I'll call the police!**」と脅すように叫びます。私がさらに困惑し、「**Sure, you can call the police! You're the one who violated the rule**」と言うと、彼はもう一度「**I'll call the police!!**」と繰り返すと踵を返して戻って行きました。私もとりあえず安全な自分の車に避難して鍵をかけ、彼の呼んだであろう警察が来るのを待ったのですが、なかなか来ません。真っ暗な中、目を凝らして彼の車が止まっていた向こうを見やると、何と跡形もなく消えているではありませんか!逃げるなら何で警察を呼ぶと言ってきたのか、彼の堂々とした態度とのギャップに自分の目を疑いました。理解できずについChatGPTに彼の心理を訪ねてしまいました。私が腕力の無さそうなアジア人女性なのを見て、強気で行けば押し切れると思ったのかもしれませんが。

とりあえず私から警察を呼んで事情を説明しました。当初は交差点のカメラを元に捜査できると言われましたが、後から問い合わせるとそのカメラは **live only** だったそうで、結局当て逃げ犯は見つけれませんでした。夜中という時間帯、スタンフォードから向かってきたこと、年齢的に学生には見えなかったことから、大学で雇われている清掃員の一人ではないか(スタンフォードの清掃員はほぼ全員ヒスパニック、夜中勤務するというブラックゆえの搾取構造を正直感じる)と思います。事故から2週間後、私の方で一回張り込んでみました。同時間帯に左折禁止の同交差点を左折していく、同じ色の車があったのですが、その車体にはぱっと見傷がなく、ドライバーの顔も暗くてよく見えませんでした。車体の特徴とプレートナンバーの一部は覚えたので、もう一度行って車を見つけドライバーが車に乗り込むところから見張るか、でもそこまでしても相手の車体に傷がなければどうせ証拠不十分か、悩んでいます。警察から逃げるような奴なので、頑張っただけで追求したところで無保険ドライバーかもしれません。修理費用は自分の **collision** 保険でカバーできるし、カリフォルニアでは自分に非がない事故では保険料は上がらないと法律で決まっているらしいので、このあたりが引き時なのかもしれません。私からここまで読んでくれた方に向ける教訓としては、①車の保険には **collision** を必ずつけておくこと! ②事故の時はどんな状況でもできるだけ相手のナンバープレートを覚えておくこと!の2点です。アメリカは多様性社会なので、自分とは異なる常識を持ち合わせている人が本当にいっぱいいます。以上です!